

の羽音晴れくしくして、朝日の光り淡く檣を彩り、我が船は海の朝靄の中に進み入り、寒ければ再び内に引込む

キリ／＼と帆を揚ぐる音したるは、半時ばかり過ぎて後也、立出で見れば、順風にはわらぬを、舵と帆とにて巧みに利用し、船は矢を射る如くに進み始めたり、霧は半ば散じて、なほ水上に粘せるものを留め、藤鼠の空に朝日匂ひ渡り、我が船の帆のみは金茶の色に染められつゝあるに、遠き他の船のそれは皆薔薇色を呈せり、『いゝ天氣だねえ』『え、御天氣で御坐んすなア』

暫くは、干物の俵に腰打掛けて、四邊の風景を貪り、霧よりは少しく濃く、空の藤鼠に少しく藍を加へたる程の山の、彷彿依稀として現れ来るを數へつゝありしが、急に悪寒を催し、頭岑々として痛む、乃ち蒼皇として苦屋の中にもぐり込み、半ば以上灰になりたる火鉢を抱へ込む、折柄、棹を操る手明きて、内の整理に取掛るべく、腰をたゞ／＼入り來れる燦アは、『風を御引きなさんしたか』と云ひて、かの、親仁が脱ぎ棄てし夜着を取り、予が肩に掛け呉れ、兩手に一盃の消炭を搦ひ來て火鉢に入れ

たり、まだ此船に乗らぬより、恐ろしく汚なき夜着なりと思ひしが、かの時既に其被護を受くべき運命に支配せられつゝありしなるべしと、忝くも亦可笑しくなる、斯くて暫く神氣を養ふに、心地は容易く元に復したれど、再び外氣に感せんことを恐れ、塾居して旅行要心集を讀む

風は愈々まよもの追手となりたりとて、親仁の喜ぶ聲す、苦屋根に微かなる響あり隙かし見れば、充分に膨らみたりと覺しく、帆の末の危き程に緊張せるを認む、『モウ桑名が近くなりました』と云はれて、袂時計を見れば、未だ十一時に至らず、風の力にも依るならんが、熱田より桑名迄海上七里とは、三分一ぐらゐの懸値あるにあらざるやと疑はるゝ程に早し

帆を下ろして、棹を用ふる氣配也、結束して立ち出で、草鞋に掛くべき刺子足袋の、泥を吸ひたる儘に乾き固まりたるを穿き了れば、船は岸に着きて、細き海板の橋は渡されたり、約束の賃金を拂つて船と離る

## ◎伊勢路の雪の山

桑名は、可なりに繁華の町にて、傍に城址を望む、音に聞こえたる名物焼蛤を食つて見んと、御休泊御仕度所の看板ある家に入り、斯くと命すれば、あひにく蛤の生まは無し、一時間ばかり御待ち下さらばと云ふ、急ぐ旅にはあらねど、今宵は關に宿かりて、古への名物女「關の小萬」を偲び、「坂は照るく鈴鹿は曇るわひの土山雨が降る」の唄を聴かんと思へば、氣のせくこと一方ならず、御急ぎなら時雨蛤は如何にと云はれしを、あれなら、東京にも、鐘詰で来て居ると刎ね附け、直ちに車を僦つて四日市に急ぐ、此路程三里餘、賃錢五十錢

熱田附近にて遙かに見し雪の山は、早や眼前に迫り來りて、からッ風の寒きこと滅法也、襟巻にて面を包み、目ばかり現はす、春寒の伊勢路、花無くして荒涼たり

午後一時四日市に至る、海天漠々、雨を催さんとするか、將た雪を催さんとするか、どちらにしても、此寒さの上に降られては閉口也、流石は古來我國要港の一と稱せら

れたる土地だけありて、殷富の象、外に溢れ、活氣躍々として旅人を打つを覺ゆ、されど、陰漫々たる春寒の色は、活動の上を暗灰色に彩り、殷やかにして且つ淋しき光景を呈せしむ、吉高屋と云ふにて晝飯を命するに、「何に致しませう」と伺ふなど、氣取つたもの也、「急ぐんだから、何でも早い方がいゝ」と氣をいらてば、早速運び來る膳の上には、比目魚の刺身、小鯛の焼物、海のはひ溢れて座に迷るを快き、健啖六碗、豪氣渾身に湧き來れるは、先刻船の中にて、汚なき夜着をかぶり蟄居せし、其反動と覺えられたり

遠足に出でたるらしき草鞋穿きの中學生と、去年あたり中學を卒業せしらしき青年と、腰掛けて茶を呑み居たり、テョット二人の談話の寫生を試みん、「山田のビッグはまたこびついで居ますか、吉村のやうに夜逃げをしまへんか、さうですか、フオックスはまだやめられやしまへんか」、これは教師の惡口なるべし、「煙草を吸うて居つたら、巡査が來ましたさかい、うまい事云うて、拾つたと云うたら、ポケットをしらべる、外套のポケットに入れて置いたさかい、よう探しまへん」そりや新米の巡査や『名

前を聞いたさかい、嘘云うてやりました、名前を云ふおはありやへん』

勢ひに乗じて、四日市より石薬師迄の二里二十餘町間に、例の驅足の徒歩を試む、始めはいさゝか腹の苦しさを覺えしも、何時しか忘れ果て、強く後より吹き附くる風に乗じ、掛聲諸共飛奔すれば、寒氣を驅り盡くして額に汗を浮ぶ、斯くて、三時半石薬師に達したるが、此所は、臍の尾切つて始めて木賃宿てふものに泊りし、予が紀念の地なれば、十餘年以前の事を想うて、今昔の感に堪へず

石薬師より龜山迄の路程は、四日市より石薬師迄のそれと略ぼ同じ、車を僦うて乗る、賃錢四十錢

十餘年以前に泊りし木賃宿は、京都方面より見ての取ッ着にあればと、車の上より注意す、彼方よりして左側なれば、此方よりして右側ならざるべからず、遂に木賃宿らしき掛行燈を認めて、それかと思ふに、近づき見ればそれならず、斯くて、空しく掛行燈を看過すること三つ、四つ目のそれは果してそれなりき、十餘年前にてさへ、傾きてあぶなげに見えし茅屋、今や如何ならんと思ひの外、其傾き加減も、古び加減

も、左して昔に變りたる點見えす、案外其ねばり強さに驚かされたり

これより龜山迄は、昔の旅の回想に耽りて過ぎぬ、庄野の宿などは、恍然且つ茫然の間に通り盡くし、龜山の城址を右に望みて、始めて我に返ると共に、車の上の寒さ堪へ難く、龜山より關迄は纔に一里半と開けば、此間を徒歩すべく決す、此車夫驅くること疾からず、龜山に着けば六時に近し、銀色の山眉宇に迫り、暮寒水の如く、凍意空に横たはりて、落日の紅彩に映す

◎古風なる關の旅籠屋

驅けに驅けて關に入れば、方に七時也、鶴屋と云ふに宿す、屋根大きく柱太く、二階の往來に出つ張りたる、頗る古風の家也

先づ凍え固まりたる身體を暖め柔げんと、案内を受くるに、風呂場は新築にて、戸に西洋形の丸きハンドルあり、大に氣取つた積もりなるべきが、家と不調和なること甚だし、着物を脱ぐべき場所も無く、左りとして浴衣も貸さなければ、已むを得ず便所に

通ふ廊下にて脱ぎ、手すりに掛け置きて入る、下たのタ、キは未だ乾かぬ故、橋の如く置かれたる板を渡りて浴槽に至るに、二人を容るべき箱風呂にて、一方には、鐵砲を蔽ふ板圍ひあり、木の香高く鼻を衝き、木漣にて湯の色少しく變れり、二月の寒さに鋒ある感じは、此風呂に入りて更に痛切となり來る也、こゝにて卒然一句浮ぶ、發句になるやならぬや分らねど、俳味を覺えたる此時の感を留めん爲めに記す、ウツロヤ「二月や木香新しき旅籠風呂」

からだを拭くもそこゝに、着物を取つて引ッ擔ぐ、フト目を放てば、中庭を隔てて物置に並びたる、燈光暗く淋しげなる一室に、赤子の頻りに泣く聲して、亂れ髪に骨立ちたる女の影法師障子に映る、何となく、旅の哀れ身に浸むを覺え、振り返りゝ廊下を行きて、階子段の半ばを登る迄幾度と無く視る

手が室は二階の八疊にて、窓を明くれば細かさ格子也、獅噛火鉢に似て極めて低く、箆笥の鎖を倒さに着けたるが如き兩の耳あるに、五徳を置いて鐵瓶を掛く、頗る古雅也、本膳は、メシの刺身に、煮豆、二の膳は、瘦せて頭のみ大なる鯛を焼き、醬油を

掛けたるが、物々しく大皿に幅を利かせ、此外、鹽辛き奈良漬の香の物を添へたり、給仕の少女、十四ばかりにて氣味の悪い程小間ツ茶くれ、ノベツに話し掛けては客の機嫌を取らんことを要す、我輩敢て、今日の關に小萬の如き名物女を見出だし得べきを信せずと雖も、古風を留むること多き此地なれば、昔乍らの唄を聞くのみは、望んで得られざるにもあらざるべしと、其意を少女に語れば、『聞いて參じまひよ』と立ち出でて、聽て番頭らしき男を伴ひ來る、予は、金谷にて昔の大井川の川越人足と語りしことを告げ、舊幕時代の馬士の生き残れる者を招き、『坂は照るゝ』を唄はして聞きたしと云へば、『なんば金を御出しやはつても、此所へ來て唄ふ者はありやしまへんさかい、料理屋へ御出なはつて、藝子はんは唄はせなはつた方がようおます』との挨拶、『成程、それもよからう、それぢア、二時間ばかり行つて來るから、案内をして呉れないか』

◎怪しき料理屋にて「坂は照るゝ」の唄を聽く

十分時の前迄は宿屋の二階に在りし銀月、今や大盡然と構へて、怪しげなる料理屋

の一間に陣取れり、扱て、纒か二町の路なれど、案内者となりたる番頭をたゞ返すも本意ならずと、懐を探り見しが、折悪しく五錢も十錢も無ければ、二十錢銀貨一つ與へしに、此地にて斯る事は珍らしと覺しく、番頭驚喜して三拜し、笑顔ホク／＼出で行きぬ

それはよけれど、番頭我輩を睨んで、大金持の若旦那或は貴公子の、贅澤に飽きたる酔興の微行となし、其旨を此怪しげなる料理屋に申含めんとにや、又もや引ッ返して女將を呼び、何かヒソ／＼打語らふ様子、間を隔てたれど大抵推測されたり、要らぬ事とは思へど、遮莫何するものと度胸を据え、益々悠然と構へ込みたる、大なる眞面目は大なる滑稽に一致す

東京ならば料理屋の女中と云ふ段格の女、否な、寧ろ淺草あたりの銘酒屋に見るが如き地位の女、『今晚は』と作り聲して入り來れる、これが其藝子はんなる者なるべし、されど、何にても好し、我れは唯だ「坂は照る／＼」の唄を聴けば足るものと、更に驚かず盃を啣ひ、然る所、又もや『今晚は』の妖聲と共に、件の如き異體の女入り來れり、これには乃公少しく眉を動かしたれど、畢竟何するものぞの度胸に依つて、纒かに自ら

擇ふ

聽て、予の前に置かれたる大形のチャブ臺の上に、運び込まれたる御馳走の數々、次より次と引きも切らず、見る／＼其數六七種に及んで、何が何やら更に分らず、而も、御馳走を運び込むの三度目か四度目には、『今晚は』の妖聲必ず之に伴ふぞ奇怪なる、終には、御馳走十三種、藝子はんなる者五人に上つて、始めて大鼓響き三味線鳴り、就中最も若く最も赤き着物を着たる者起つて踊る、或はや、其亂調の騒々しさ、充分度胸を据えた積もりの我輩も、終にはたまり兼ねて兩手を開き、『まア待つて呉れ』と御頼み申上ぐるに至る

「僕は、坂は照る／＼の唄を聴かしてさへ貰へば、其外に望みはないのだから、どうぞ一つ頼む」と、やゝ嘆願の體、『そんならやりまほか』と、一座の老妓五寸ばかり膝をにじらせ、勿體らしく三味線の調子を合せ直して、仰向き加減に咽喉を膨らす、「坂は照る／＼」鐘應は響るあひの土山雨が降る」

重の井子別れの義太夫にて聴く節とも異なり、「坂はア」と長く引いて、「照る〜ヨ  
ウ」と二度繰返し、それより合の手となりて、「坂は照る〜鈴鹿は曇る」と膨れ聲に唸  
り、「あひのオ」と引いて、末を押へ、「つちやアア」と軽く放し、「雨がア」と長く引き、  
「降るよッ」短く切り、「オヤ〜」と添る也、都々一の如く、木遣りの如く、長唄の如  
く、義太夫の如く、喇叭節の如く、何だか變手古來のもの也、「昔の鈴鹿山を越す馬士  
も、こんな節で唄つたもんだらうか」と問ふ我輩は、少なからず興醒め顔なりしなるべ  
く、「さうでおまつしやろ」と答ふる女共も、昔の事は存じませんと済ました面にて、却  
つて、そんな事を根掘り葉掘り問ふ我輩の野暮さ加減を憫むもの、如し、全く以て御  
話しにならず、「與件思へば照る日も曇る關の小萬の涙雨」、嗚呼昔女今何所にか在る  
聴くべき唄は聴きたり、いざ勘定との段となる、料理は十三品、其中食ふべき物か  
見るべき物か分らぬもなれど、兎に角十三品は十三品にして、而も一人前づゝにあら  
ず、一々大皿に並び、大井に盛らる、酒は、我輩の飲みたるが僅に五六盃にして、藝子  
はんなる者共の飲みしも總計十五盃に上らざるに、徳利の並ぶこと林の如し、豫め工

らんでしたる事なれば、少なくとも、十圓札の二枚も取る積もりならんと思ひの外、八  
圓三十四錢とは何たる安い事ぞ、それにて、此土地の此料理屋にては、澤山取りた  
る分なるべし、思ひ掛け無きいゝ鳥の引掛りたるべし、藝子はんなる者共には、態と  
一文の祝儀も呉れず、「大きに御厄介になりた」と云ひ棄て、他を晒ひ併せて自ら晒ふ  
の何々大笑を残し、宿屋より穿いて來し下駄を取り出ださしめ、「お泊りなさら」と、魔  
窟の真相を示して引き止むるを、「こゝらで切り上げるのが、どちらのボロも見えなく  
つていゝのさ」と振り拂ひ、飄然として出づ、外はよき月也

宿に歸りて枕に就けば、十時半也、臥し且つ記す（關、鶴屋に於て記す）

宿料 八十錢 茶代 三十錢

女中心附 二十錢

◎關の地藏に涙を墮す

此日は、旅行の終りにて、第二日及び第三日にも優れる感興多き日也

午前六時起床、早々に顔を洗ひ、飯を食ひ、勘定を済まし、坂下迄車を貸ふ、途中、有名なる關の地藏に參詣の約束にて、賃錢四十五錢、一里半餘りの路を、餘りに高しと

は思へど、鈴鹿に向つての片登りにて、

車夫の骨を折ること平地の倍に過ぎ、且

つは、坂下の宿の人家盡くる所迄赴くべ

ければと、昨夜以來馴染になりたる番頭

の説明に任せ、異議を申さず乗つて出で

たり

關は、鈴鹿峠の前に控へたる樞要の地

にて、併せて伊勢街道の分かる、所なれ

第

二

七

二

朝曇、益々、後晴、寒甚だし

午前七時關、鶴屋發

關より坂下迄人力車、途中、

關の地藏に詣る

坂下より徒歩にて鈴鹿峠

を越す、關より猪の鼻に赴

く女と道連れになる

猪の鼻にて一酌

猪の鼻より土山迄徒歩

土山より石部迄人力車

草鞋日記

十日  
 石部にて晝飯の代りに銀  
 純な食ふ  
 石部より草津迄人力車  
 草津姥が餅にて皿を貰ふ  
 草津より京都迄人力車(二  
 人乗)  
 午後八時京都四條中村屋  
 着  
 此日行程約十九里

ば、古への繁華、金谷、三島に匹敵し、之  
 が爲めに、後世迄名を歌はる、「關の小  
 萬」の如き名物女をも生せしが、今は、鈴  
 鹿と共に文明に疎外せられ、纔に、關西鐵  
 道に拾はれたる一小驛として餘喘を保ち  
 つゝあるのみ

の如き歴史的物件を愛する旅客に幸するは、亦物質的文明に疎外せられたるの賜也、少  
 なくとも、二百年以上の物なるべしと思はるゝ、長屋造りの大なる建物多く、二階は  
 往來に出ツ張りて、細かさ格子を箝め、格子の下を家の一端より一端に通じたる、幅  
 廣く横に長さ木に、サヤ形の彫刻を隙間無く施し、なほ其部分々々に下り藤の紋を彫  
 り出だしたるなど、古味溢るゝが如し  
 町を出で、雪白き山々、前面より我に向つて歩み來るが如く、帽簷之に壓せられ

て重さを覺ゆるの所、左側に、古色蒼然たる大建物あり、此に至つて我が車停まる  
 瓦葺きの殿堂の、正面の簷下に掲げたる大額、地藏尊と、古雅遒勁の草書にて刻み込  
 める文字に埋めし碌青の、其大半は剝げ落ちたる、老蒼の致云ふべからず、此日天恰  
 も曇り、東方南方は蠟の如く、西方北方は油に似て、四隅より簷牙に垂れんとす、四  
 月一日より開帳を爲すに就き、殿堂の修繕中なりとて、固く戸を鎖し、楹には大工數  
 人居て、木を削り、鉋を掛くるに忙はしげなれど、手斧の光り、丁々の響、却つて春寒  
 の趣を成すのみ

參詣の由、車夫より通すれば、横手の戸少しく明きて、腰法衣の僧の半身現はれ、此  
 方へと招くに、大工等に會釋して、道具を跨ぎ、鉋屑を踏み、刺子足袋を脱ぎて堂内に  
 入る、朱漆を塗りたる柱、金を塗りたる柱、皆古びて黒みたるが、予が入りし隙間よ  
 り來る些かの明りにほのめきて、陰森の氣人を襲ふ、關の宿の曉を淋しくする春寒は、  
 此堂内より醸し出ださるゝかと思はる

空殿人無き所、予一人を残して、僧は一たび奥の暗き方に消えしが、間も無く、墨



染の法衣を着けて殊勝げに立ち出でたり、『御開帳を致しませうか、料金は三錢で御座います』と、黄色の澤を出されて、感興俄に去らんとせしが、どんな藝當をするか見てやらんとの好奇心に助けられて、『願ひませう』と三錢を出たす、僧は徐ろに進んで、正面の厨子の傍に立寄り、横より垂れたる絲を引く、錦の帳はキリ／＼と捲き上がる、暗澹たる所に眞黒の地藏尊、勿體無き比喩乍ら、くらやみに牛の如し、されど、分らぬ所が有難き所以ならん、懸て座に直りて、高らかに縁起を読み上ぐる僧、頭を低れて傾聽する予、聖武天皇の御宇、天平十三年、行基菩薩が刻みたる尊像なりと聞きて、開帳料の一條も忘れ、急に尊く有難くなり、始めの形式的に低れし頭、自ら眞に疊に附くやうになりて、心耳共に澄み渡りたる折柄、僧は一際高く聲張り上げて、『日本最初の地藏尊也』と喝破す、此に至つて、予は涙霰の如く疊に落つるを禁ずること能はざりき、是れ、歴史に對する崇敬の念の刺戟也、されど若し、予の來れること今日の如き春寒の疊天にあらず、空殿深く鎮して寂として人無きの日にあらずば、かほど迄身にしみ／＼とはせざりしならん

安産の腹帯二錢、安産の御守五厘、御符一錢、縁起五錢、紀念の爲め何れも申受く、『關の地藏に振袖着せて奈良の大佛聲に取る』の俗語を刷りたる紙片、安産の腹帯に結び着けられつゝあり、僧は、此外に一冊の帳簿を取出だし、勿體らしく咳拂ひして、『來る四月には、當地地藏尊の開帳がありますので、御覽の通り普請を致して居ります、御志があらば、多少に拘はらず御寄附遊ばしませ』と、矢張り、縁起を読み上ぐるが如き調子にて唸り出す、乃ち、十錢寄附して、帳面に名を署す、無名氏、某など書きたる前例も多かりしかど、予は明らかに、所番地と姓名とを記るし、タツタ十錢にて、二千年の古佛の前に名を留むるを得たる光榮を感謝して退く

### ◎俗語に證せられたる鈴鹿の氣象

峯巒四面我を圍み、車の楯棒右に轉じて坂路漸く急に、鈴鹿威しは眞正面に打附け來る、其濃やかに冷たきこと、小さきナイフにて丁寧に顔の皮に切り目を入れらるゝが如し、宇都の谷峠、小夜の中山などは異なり、深山大澤に入るの趣あり、數日單

闕なりし旅行、此に於て一大變化を興へらる。

右方に突起して、全面松樹に包まれたる山あり、樹間所々に巖角の露出するを見る、而して、頂上高く樹梢に抜ける數塊の巨巖を大黒巖と稱す、形ち大黒天に似たるが故なりと云ふ、予は、青黒色の醜怪なるそれを見て、一種豪壯の感を起しかけたるに、名の俗悪なるを聞いて愛想を盡かしぬ。

弘法大師の筆捨山なるもの、亦右方に在り、巖石の怪奇、遂に大黒巖の山に過ぐ、脚下數丈の所、奔流石を鳴らし、清冽玉を溶かしひるが如く、筆捨山の麓を繞つて曲折す、是れ鈴鹿川也、此川には、河鹿を棲ましむること多く、其聲の美、遂に他地の産に優れるより、前には、之を聽いて樂むべく、態々笛を曳くの風雅人もありしかと、今は、見附かり次第捕へて東京へ輸出するより、年々に減少して、聽くこと極めて稀なるに至りたりと云ふ、之に附けても、東京と云ふ所は悪い所なりと思ふ、なほ、昔は、筆捨山を眺むべく、路のほとりに五軒の茶屋ありて、鈴鹿川より捕りたる鮎の鮓を名物となし、が、文明に疎外せられて以來、残らず引拂ひて、跡方も無くなりたりとぞ、『其

鮎も、東京へ送る爲めに無くなつたのではないか』と笑へば、『いゝえ、鮎は今でも捕れます』と眞面目也。

以上の外、山は皆巖石を帯び、之を外に露はさざるものと雖も、尖角稜々、皺壁深く刻まれ、骨相盡く奇俊にして、箱根以西の數日間に看過し來りしものに比し、風貌全く異なれり。

加之、古へより鈴鹿峠は曇り易く降り易き所と稱せらる、朝來滿天に布き渡されたる陰雲は、烈しき鈴鹿嵐に吹き捲くられて、海の方に却走し、一時青天を現じたりと見る間も無く、險悪なる鈴鹿の嶺は、噴火山の煙の如く暗紫の雲を吐きて、忽ち半空を呑み、蛇形となり、鬼態となり、三頭の獸となり、八翅の鳥となり、變幻して窮まる所を知らず、風益々烈しく、而して其過ぐる所に色あり、鈴鹿に棲みし鬼神てふものも、山相の兇猛なると、陰晴變幻の急激なるとよりして、恐怖の念を懐かしめられたる人々の、想像の産物なるべしと思はる、蓋し、北方より琵琶湖の面を渡り來れる風に吸収されたる多量の水分は、此山に觸れて凝集し、雨雲となるものにして、鈴鹿の曇

り易く降り易きは、理由を有せる事實ならざるべからず、前に挙げし「坂は照るく」鈴鹿は曇るあひの土山雨が降る「與作思へば照る日も曇る關の小菫が涙雨」の兩俗諺、之を證す

一橋の風致凡ならざるあり、下には清流瀑布をなして、巖石の姿態頗る秀でたり、之を辨財天橋と云ふ、傍に辨財天の祠あるを以て也、昔は、如何なる高貴の人にてても、女性には必ず駕籠を降りて此橋を渡りしと云ふ

天狗巖なるものあり、青黒の色、兇猛の相、此巖に於て殊に著るし

伊勢近江の國境をなせる三つの山は、三峯並立して頭を擡ぐ、此山海上よりも特に指點すべしと云ふ

予は、風景と歴史とに魂を奪はれて、骨に徹するの寒さをも苦にせず、一點二點、インパネスの袖に花を綴る雪片をも、却つて趣ある物の部類に算入す、此山に入りてより所々に梅花あるも亦一奇也、雪青く梅黄なりと打興じて、獨り喜ぶこと限り無し

### ◎鈴鹿に於ける古き風俗

五十餘りなる丁髷の親仁の、人力車を轆いて山を降り來るを見る、これこそ、昔の馬士の古手なるべく、「坂は照るく」は、此所にて此親仁に唄はしめて、始めて趣味あるべきものなりと思へど、彼も亦客を乗せつゝあれば、遺憾乍ら云ひ出さず已みぬ

坂下の宿に近くして、横手の山道より現はれ出でたる男あり、斧を肩にしたる樵夫風にして、其穿きたる裁附袴こそ古風のものなれ、あれは何にて造りたるものぞと、我が車夫に問へば、鹿の揉み皮なりと云ふ、鹿の揉み皮の裁附袴を穿きたる樵夫！何ぞそれ古鈴鹿的なる、車夫なほ説明を加へて曰く、鹿の揉み皮は、如何なる荆棘の裡を行くも、滑らかにして引ッ掛からず破れざるより、山人には無くてもならぬものなりと、予は、餘りの床しさに、金をやつて其裁附袴を貰ひ受けんと、車を停めしめて談判を開始したるが、山人カンラカラ〜と打笑ひて曰く、「昔は、鈴鹿の山に鹿が多く居りましたさかい、上げて直きに代りは出來まつしやるが、今は、鹿一匹捕るのが、並大

抵の辛度までおまへん』

◎關の女と道連れになりて鈴鹿を越す

坂下の宿は、全く文明と隔絶せるを以て、其古風なること、關より更に一世紀前の世界に入るが如し、例の、二階の往來に出ツ張りて、横木に紋章を彫刻したる、巨大の長屋造り多く、小口より見れば、屋根高くして、「へ」の字形の筆端左右に長し、小皿に菓子を盛りて店に並べたるなど、甚だ明治式に遠し

坂下の人家軒を並べたる所を通り過ぎて少しく行けば、路甚だ急峻にして、樹木段をなす、車夫一步々々に喘ぎて、辛うじて古りたる茅屋の前に至り、地盤を擇びて梶棒を下ろす、車の至り得るは是迄也、これより上は、二人輓にて纜に登るべしと雖も、今は雪あればそれも叶はずと

太き柱、厚き板の普請にて、古色掬すべきが上に、よく拭き込まれたれば、光り渡りて山の影を映す、土間に焚火あり、腰掛け乍ら足さし出だす、凍意凛烈、何となく此

古き家の唸るを聞くが如し、鶏卵二個を嚙り、價を問へば二錢づゝなりと云ふ、殊の外安しと思へり、關より、刺子足袋の儘にて車に乗り來りたれば、こゝにて始めて草鞋を買ふに、其價一錢五厘、是も亦甚だ廉也

草鞋の緒を結びて、足踏み固め、いざと立ち上がらんとしたる折しも、此寒さに、願よりポタリ〜と汗を滴らす男に輓かれて、一臺の車登り來れり、客は二十餘り二つ三つの女也、降り立ちさま子に向つて、『峠は淋しうおすよつて、一緒に持つて下はれ』と云ふ、打聴れば、此古風なる山路を行く人に似合はしからぬ、薄紫の縮緬シヨートルに、我が目先づ驚けり、着物は荒き藍縞の銘線、羽織は同じ黒地の緋にて、都には珍らしからぬと、全然此邊の田舎の風俗と異なるいでたちなるが、見も知らぬ男に馴れ〜しく言葉を掛けて、往來稀なる山路を共に登らんとは、よもたゞの娘にてはあらず、『一緒に持つてもようがすが、あなたはそんなゾロリとした風で、お負けに下駄穿きでせう、わたしは又、こんな身軽ないでたちで、ドン〜驅けて山を越さうと云ふのですから、チト迷惑ですわねえ』と、柔かに拒絶して立ち上がる、『あなた、なんば

足が早くて、これから上は、よう驅けて止がりやばりまへんわ』と、からかひ面に打笑ひつゝ、早や風呂敷包みを抱へ、襦を捲くり上げて帯に挟み、幽禪縮緬の蹴出しを下げて、手より先きにズン／＼立ち出づる女、斯る仕宜となりても飽迄逃げを張るは、自ら顧みて卑怯の嫌ひありと、『そんなら御一緒に行きませう、何所迄御出でなさるんです』猪の鼻へ参ります』猪の鼻と云ふは、土山の手前ですか』ズーツと手前とす』

坂下より土山迄、鈴鹿を越して二里半なれど、車の停まりたる茶店は、坂下の中心點より登ること十數町なれば、これより峠迄は左程遠からず、路の中央には雪あれば、女と兩側に別れて、端の少しく濡りたる土の上を行くに、成程、急峻なること階子を登るが如く、チカ／＼驅けて上がるの段にあらず、十餘年以前の旅行には、降りなれば、空身の軽さに任せて、無茶苦茶に驅けしかど、今は左様に参らず、『るらうおまつしやろ』と、女に冷笑されても、返すべき言葉無し、鞆一つにて、此際充分の厄介物なるに、何とて蝙蝠傘迄予を苦むるならんと、右に持ち換へ、左に持ち換へ、果ては、刀の如く腰に差す、『御傘を持つて上げまひよか』と振り返へられて、手より却つて女の足の早

きを知る、『わたしは、月に二度づゝ此山を越しますさかひ、馴れて居りますわ』と、ソロ／＼自慢を云はるゝ仕宜也、『こんなヒドイ山を、女の人が一個で、月に二度づゝ越すとは、何かわけがありさうですね、神か佛へでも御参りですか』と鋒を轉すれば、『いゝゝ、御金を取りに』とは案外也、少しく腑に落ちねば、『御金を取りにとは』と我知らず口に出づ、『掛取りとす』と、正直なもの也、女はなほ其身を予に紹介して云ふ、『わたしは關の者とす』と、『さうですか、僕もゆふへは關へ泊りました、昔の關の小萬と云ふ女も、あなたのやうに面白い氣性でありましたらう』ホ、わたしなんか、關の小萬が龜山通ひ、月に雪駄が二十と五足と、云ひやすよつて、やつぱり、こんなにして歩いたもんどすやるか』

頂に近くして祠あり、『馬が物云ふた鈴鹿山で、よう云ひまつしやろ、御馬さんを祀つてあります』と指す、『それから、モウ少し行きやばると、せんざい屋がおます』ズン／＼案内者氣取り也

繼て頂上のせんざい屋に達す、昔は、せんざい即ち汁粉を食はする家、軒を並べ、『ど

んな御殿様でもせんざいを上がりやはつた』との事なれど、今は残れるものタツタ一軒、茶碗の中に薄き赤小豆の汁ありて、最下等の砂糖を用ふるらしく、黒く濁りて泡立ち、馬の小便の如き臭ひあり、搗いて水に漬け置きたる柔かき餅、箸に掛くれば融けて流れんとす、世にまづき物の頂上也、されど、關の女に侑むれば、顔もしかめず二碗を平らげたり、但し、一碗の時には『呼ばれます』と云ひ、二碗の時には『あらう濟みませんなア』と云へり、三白眼にて、鼻筋通らざれど、色白く、口に近く兩笑渦ありて、ほえむ顔に愛嬌ある女也

『大名でも何でも、此所を通る者は必ずせんざいを食つたとすれば、随分金が儲かつたらうなア』と云へば、紺の筒袖布子を着たる嬾ア嘆息して曰く、『昔は人が薄情でなかつたさかい、金を貯へやうとも思はず、今になつては、とんとあかんことになりまして』と、せんざい一碗一錢、二人にて平ぐること四碗、茶代を兼ねて五錢を投す

これより路は波の如く、多く降りては少しく登る、米を積みたる荷車を輓ける男の、登り路に惱みつゝあるを見て、一番義侠心を發揮し、押し上げてやる、女感心して曰

く、『わんたはん、親切な御人やなア』

女の所謂猪の鼻なる所に至る、『わたしは此家へ入りますさかい、御休みやして御出でなはれ』と、上半が障子になりたる戸を開く、『そんなら、暫く休まして貰ひませうか』と入る、一寸一盃と云ふ飲食店也、矢張り紺の筒袖布子を着たる、三十ばかりの美しき女房あり、關の女が何か耳打ちすれば、首肯いて直ちに膳仕度をなす、關の女は、萬事呑込み顔に、傍の棚より爛徳利を取り、口附きの樽の香ばしき水を移し入るゝと云ふ次第、我輩少々氣味悪くなり、茶代を置いて立ち上がりんとするを、關の女は慌ただしく引き留め、『まア、一盃上がつて、暖まつてから御出でなはれ』と云ふ、『そんなら』と、こゝでも亦度胸を据える、我乍ら据り易き度胸也、卵子焼に大根おろしを添へたるをさかになに、關の女の酌にて數盃を傾く、『今日は京都迄行かなければなりませんから』と、留むるを強いて振り切り、『勘定』と云ふに、『ようおます』

『そんな事はありません』一緒に来て下はつた御禮の心どす、押問答際限無ければ、『そんなら御馳走になつて置きます、御縁があつたら、又何所かで御目に掛かれませ

う』と別れを叙す、『京へ御出でやはりますなら、御歸りに關へ御寄りやす、關の木崎で、岩田スエと御尋ねやはると、分かりますさかい』、彼れ名乗るに、我れのみ幽靈然と立消えになられず、尋常に住所姓名を告げて出づ、此時關の阿末に示す一句あり、

「春寒の近江に向ふ別れ哉」

### ◎本家お六櫛

猪の鼻より土山迄一里に足らず、途中に田村神社あり、坂上田村麿を祭る、林深く雪残り、一拜して出づ

土山宿の入口に、三日月屋てふ櫛屋二軒あり、何れも本家お六櫛と記るしたる看板を出だす、昔し土山にお六と呼ぶ俠艶的ありて櫛を賣る、往來の旅人、其一笑を買はんが爲めに争うて之を買ふ、是れお六櫛の濫觴なりと、乃ち入りて求むるに、極めて卑びたる漆塗りの小櫛にして、一枚一錢或は二錢也、五枚を購ひ、一々家の名を刷りたる紙袋に入れしめて出づ

### ◎近江路の車上に凍ゆ

土山にて、石部迄の人力車を僦ふ、此路程六里餘、賃錢一圓

近江路の寒さは又格別也、加之、まともに北に向つて車を馳するなれば、骨も髓も冷え、血も肉も固まりて、殆んど堪ふべからず、車はガラ／＼降りるの長さ一本路を飛びては、時々、短く急なる坂を登る、林ある所必ず雪あり、林無き所は路乾いて龜裂せんとす、乾燥の極也、凛烈の極也、而して、此間一樹の梅花を見ず、梅樹無きにあらず、花未だ開かざる也

蒲團に紐の附きたるが如き防寒具を以て背の子を負ふ子守女、綿フランの切れを冠り、紐を額の上に互違ひにして盆の凹に結ぶ少女、何れも江州の寒さを語る、女の子の、不斷着に緋金巾の裾裏を着け、フキを厚くしたる、京式也

途中水口を過ぐ、十餘年前には、鶏鳴前の深夜に通るしが、今見れば繁華なる町也、家の造り、風俗、殆んど全く京式にして、少しく之を粗野にしたるのみなれば、取り立

て、云ふべき材料を見出ださず、唯だ、當時予が宿りし林間の小さな祠を左に見て、感慨を催すこと石薬師に於てせしが如し

石部に至れば、午後二時を過ぎたり、暖かさうに湯氣を立てつゝある温飩屋を見附け、車を其前に停めしめて入る、温飩を命ずるに、皿に盛りて甚だ暖か也、青白打雑へて刻みたる葱と、唐辛の粉とを薬味に、三皿を平らぐ、したちは淡白にして云はれぬ美味あり、何となく支那的趣味也、更に蕎麥を命ずるに、是亦蕎麥の粉の分量多くして、頗る好し、したちには何を「だし」にするかと問へば、『ミイザンを使ふと、悪口を云はれますけど、實はハゼでおます』『其ミイザンが分からぬ』『蛇のここといす』我輩蛇の干物を食ひし経験あれば、真に蛇のだしなりとて驚かず、其儀ならばと、更に一皿の蕎麥を命ず、一皿二錢、總計十錢

石部より草津迄、更に人力車を僦ふ、此路程二里半、賃錢四十錢、大湖に近うして、寒氣益々酷烈なれど、京都に至り得ざらんことを恐るゝを以て、更に十錢を奮發し、『飛べ〜』と疾く奔らしむ、雪に蔽はれたるの峯巒、左右より兩頬を焼く

### ◎姥が餅にて皿を貫ふ

草津に至れば四時也、姥が餅迄車をやれと云ふに、昔は往來にありしかど、今は鐵道の停車場前に引越したれば、態々寄り道せねばならずと澁る、乃ち更に五錢を與へて至らしむ

慶長時代に建てし儘の木材を其儘用ひて、昔の形に造りしてふ、寺院の如き大建築物、前よりは二階ありと見えて、内に入れば、大佛殿式に天井迄通り、裏口迄續きたる土間の左右には、家の中に更に家ある如く室を列す、物云へば陰々として四隅に響き渡る也、一人にて持ち難く見ゆる鐵の大火鉢、立たざれば自由に手を烘られず、是も亦家と共に古き物と覺えられたり

縁の無き平面の皿に、茶碗の絲底の如きもの、附きたる、其形甚だ古雅にして、碧色の物、紫色の物、共に一様に、松葉掻きを交叉したる繪あり、上に「千代の春契るや尉と姥が餅」と賛す、一點々々、雪を戴きたるが如く砂糖を帯べる餡餅、味は阿部川に



譲るが如しと雖も、家と器、就中此皿には恍然たらざるを得ず、即ち、二皿を平らげ、別に一折の餅を買ひたる上、懇ろに皿を望む、三十錢出だして二枚を買ひ得たる我輩の喜び、連城の壁も物かは、但し、餅は一皿四錢、折詰は十五錢

### ◎月の琵琶湖、闇の京都

草津より京都迄、二人輓の人力車を僦ふ、三條大橋迄の路程六里半、此賃錢三圓日暮の琵琶湖畔、車飛ぶこと鳥の如く、松聲急雨に似たり、願れば、純白の比良山に淡雲かゝりて、朱鷺色の薄絹を飄へす、湖中遙に、數艘の和船を輓き行く涼船を認む、帆影遠近、近きは灰色に、少しく遠きは淡紅色に、最も遠きは紫をなす、既にして、勢田の大小二橋を渡り過ぎ、大津に近からんとすれば、湖面暗澹として先づ夕を催し、四面の雪山、愈々其寒色を加へ来る、真に一幅春寒の活畫、冷殺の底何となく春立の脈々たるあるが絶妙なる也、車上竹外の詩を朗吟す、「桃花水暖趁輕舟、背指孤鴻欲沒頭、雪白比良山一角、春風猶未到江州」

江州の景、決して柔媚にあらず、四山稜角あり、唯だ京橋方面のみ圓く肥えたり、義仲寺にて車を停め、降り歩して二古人を弔ひ、「木曾殿と背中合せの寒さかな」と云ひし人の墓を撫し、何たる寒き夕ぞと獨語しける折、十四日の圓き月は、湖天に凝れる雲の如き氣の表に抜けり、再び車に上つて進めば、月下さゞ波の滋賀の都に梅花の氣あり、俳味と萬葉趣味と、並びに人を動かす

逢坂の關に月朧也

松の山、竹の森、殿閣、堂塔、我を送り我を迎ふ、而して、月下の路の盡くる所は闇の舊都也、疏水のインクラインに近うして、雲は比叡の空より東寺の塔の尖に垂る、車夫の導くに任せて、御幸町通り四條下る中村屋に投ずれば、夜既に八時（京都中村屋に於て記す）

# 草鞋日記畢

明治四十年五月廿二日印刷  
明治四十年五月廿七日發行

三十五次草鞋日記

金五拾錢

著者 伊藤 銀月

發行者 金尾 種次 耶

印刷者 河本 龜之助

印刷所 株式會社國光社



發兌元

金尾文淵堂

東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地





ツルゲネフ作  
二葉亭四迷譯

うきまぐさ(近刊)

露西亞の  
小説と  
佛蘭西の  
戯曲

現時の文壇よく露國の文華を傳へて遺憾なきもの、我が長谷川二葉亭四迷氏の筆にのみこれを見る。『うきまぐさ』は露の文豪ツルゲネフ作『ルーツン』の譯にして、東西の騷壇に名あるもの、二葉亭氏今其遊放の筆を馳つて彼の名作を翻譯す。原著と譯筆と相應じて、渾然として名玉の光耀を放てり。

モリエル作  
草野柴二譯

モリエル全集(近刊)

挿畫モリエル。譯者。原著者初戀の女妻誕生の家風外散葉

モリエルの喜劇は沙翁の悲劇と相並んで譲らざるものなり。今草野柴二氏畢生の努力を以てモリエルの全集を譯了し、之を我國の藝苑に移植せんとす。氏は實に全力をモリエルの研究に盡しつゝ、あつたもの、原文素より金玉を彫れるものにして、譯文亦錦繡を裁せり。希くはこの曠世の天才が遺響を氏の忠實にして眞摯なる譯筆に聴く所われ。

大坂朝日新聞賞を懸けて小説を募るや、時、日露の風雲急なるに際して尙集るもの百數十篇、漸く選を終りて一、等一琵琶歌の作者黒風白雨樓主人の所在を知らず。文壇騷然としてこれを喧傳せしが、圖らざりき作者大倉桃郎氏は旅順の攻圍軍に参加して悠然劍戟の事に従へるなり。慕ふべきかな。

綿綿として怨は長き琵琶激越の調、全篇の骨子となりて哀怨凄絶の構想、あくまで人の涙を絞らんとす。

木下尚江著  
小説靈座か肉か  
(其出づる遠からず)

小笠原白也著  
藤木清洲著

嫁が淵

定價六十五錢  
郵税金八錢

藝者に大阪毎日新聞社が賞を懸けて廣く名篇佳作を世間に慕ふや、文壇の秀才馳せ至るもの千百、皆これ錦心織腸の文字、中に就て最も傑出せるものを此一篇「嫁が淵」となす。今や好評噴々として京坂地方至る所の舞台上に脚色せられつゝ、其構想の如何に幽麗にして運筆の如何に豊艶なるかは讀了して初めて知るべきにあらず。著者今文壇に出でんとするに當り、本書即ち其劍と楯たるべきなり。

朝倉無聲編

(菊判洋装)

# 俗謡全集

(近刊)

朝倉無聲氏は篤學の人なり、曩には『日本小説年表』を著はして上は平安朝の物語より下は明治初年の草紙に至るまで、約一萬五千部を分類して、年代作者を明かにし文學界に貢献すること多かりしが、今また日本全國に亘り、古代よりの俗謡を類集して世に公けにせらる。誠にこれ日本民族史ともいふべきものにして、各地の歴史、人情、風俗等これによつて見るを得べきなり。

木下尚江著

(第五版發行)

# 懺悔

金三十五錢送料四錢

懺に惱み死生に惱み功名心に惱みたる著者が始めて人生の奥義に觸れて奮然新生活に邁進せんとするに當り既往を回憶して赤情を吐露したるもの即ち「懺悔」の一篇となす會て他を攻撃するに寸毫の餘地を許さざりし彼は今更自ら刑罰するに及んで亦た半點の容赦を與へず。故に本書は著者に取て過ぎし苦悶の告白なると同時に又實に新に挑まんとする難戰の宣言也。偽善なる社會よ一條の荆鞭既に汝の頭上に落下し來れるを見よ。

菊池幽芳著

(有益にして多趣味なる著述)

# 琉球と爲朝

(近刊)

(琉球の自然を紹介す)

この書「琉球と爲朝」離れめぐり二編を収む。前者は一面に於て史的研究なり。一面に於て自然の紹介なり。後者に至つては殆んど現世より隔離されたる美なる自然と奇なる風俗の紹介なり、由來琉球の名一種の美なる聯想を伴ふも、その地質、その動植物、その風景、その風俗、全然非内地的にして多趣味なる琉球の特色を形作れるその自然に就ては未だ嘗て世に紹介されたるものなし。著者乃ち自ら琉球を跋渉して始めて此の好著あり、筆は流麗にして記事は興味津津、縦横琉球の自然を紹介して餘すところなし。

浩々歌客著

# 鷗心錄

(近刊洋装四六版)

文藝、宗教社會に能く人生の情理を曲盡したる浩々歌客氏の文集也。現代文壇に獨歩する邊觀明義異彩ある雄麗高華の文章は收めて此の鷗心錄に在り。伊吹郊人の名を以て時壇の耳目を變動したる比興詩論、邦人の未だ嘗て指を染めざる北歐芬蘭文學の消息、劍南道士の名を以て堂々の筆陣を張りたる時文、小品、紀行數十篇、蓋し江湖讀書社會の多々益々讀みて味おへく學ぶべき絶好文字なり乞ふ愛讀を賜へ。





# 早稻田文學

東京牛込區藥王寺前町廿番地  
編輯所 早稻田文學社  
東京牛込區矢來町廿二番地  
文藝協會事務所  
○每月二回發行一冊廿錢郵稅一錢半  
○一年前金二圓四十錢(郵稅不要)

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎮たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。  
一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小説、詩歌、脚本等の創作、翻譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選抜採録すると共に、毎號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作翻譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。  
一本誌の彙報欄は文藝教育諸方面の現状を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一眸の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。  
一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。  
一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採録する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地

金尾文淵堂



31  
350



31  
350

022585-001-5

31-350

草鞋日記

伊藤 銀月/著

M40-43

ADB-0284



6:6.15